

DV 面前 心の痛手 成人後も 経験者「物音、毎日ビクビク」

警察から児童相談所への通告が急増している「面前DV(ドメスティック・バイオレンス)」。幼い頃に心に傷を負った人は、様々な困難と向き合いながら、周囲に支えられて、懸命に立ち上がろうとしている。(後田ひろえ、写真も、本文記事1面)



■死ばかり考え

「物音にもビクビクしていた毎日。死ぬことしか考えていませんでした」

福岡県内に住む会社員女性(32)は、物心ついた時から、父の母に対する暴力におびえ続けていた。

会社員だった父は、毎日のようにパチンコに行き、負けると酒を飲んで暴れ

幼い頃、父の母に対するDVを目の当たりにしてきた女性。支援プログラムの資料を手に、「子供の心の傷に気づいて」と語る(福岡県内)

た。「貴様!」とどなり声を上げて母を殴ったり、食器を投げて割ったりした。母はされるがままで、幼かった女性は自室で布団に潜り込んで、じっと耐えていた。近くの祖父母の家へ母とともに避難したこともあり、ランドセルだけを持って自宅を飛び出したことや、母の手が震えていたことは今も覚えている。

■対処法を習得

約3年前、勤務先の同僚に誘われて、困難を抱えた女性らの自立を支援する一般社団法人「WANNA関西」(大阪市)の講演会に足を運んだ。代表理事の藤木美奈子さんは、幼少期にDVを目撃することがトラウマとなり、生きづらさにつながることや、伝えている「私のことだ」。会場で配られたアンケート用紙に、それまで胸の奥にしまい込んで

女性は、父の暴力が始まると、パニックに襲われて呼吸が困難になった。物音に敏感になり、中学生の頃、トラックのクラクションを耳にして、その場に倒れ込んだ。食器をテーブルに置く音にもおびえた。

学校の同級生らと友人関係を築くのが苦手で、趣味や好きな食べ物を聞かれても答えることができなかった。生きることを楽しさを

見いだせず、「いつ死のうか」と、そんなことばかり考えていた。

■対人関係築く力に影響

米ハーバード大と共同で、面前DVが脳に与える影響を研究していた「福井大子どものこころの発達研

究センター」の友田明美教授(小児発達学)によると、幼少期に親同士のDVを目撃し続けた人は、脳の視覚野が小さくなる傾向にあるという。

外部からのストレスに耐えられるよう、脳が視覚を通じた情報量を減らすことが原因とみられ、その影響で、面前DVの被害者は、他人の表情を理解しづらくなり、対人関係がうまくいかなくなるなどの課題を抱えやすくなるという。

対人関係築く力に影響

「DVを目撃した子供が心にとだけ深刻な傷を負うのか、多くの人に気づいてほしい」。女性はそう訴える。

いた思いの丈をつづった。講演会がきっかけになり、藤木さんの支援を受け、困難に直面したときの対処法などを身につけるプログラムに取り組んだ。今は実家を出ており、同僚や友人とも良好な関係を作ろうと意識するようになった。物音に反応しても、「大丈夫」と自らに言い聞かせることで、パニックに陥ることはなくなった。

◇

「面前DV」の記事へのご意見をお寄せください。読売新聞西部本社社会部まで(メール||s-syaka@ymnairi.com、ファクス||092・715・5509)。

全焼の車に遺体

佐賀三瀬村の国道25日午前0時10分頃、佐賀市三瀬村の国道263号で、乗用車が燃えているのを通行人が見つけ、110番した。車は全焼し、助手席付近から1人の遺体が見つかり、車の外で、運転していたとみられる男性が両足にやけどを負った状態で発見された。男性は佐賀市内の病院に入院したが、命に別条はないという。

佐賀県警佐賀北署の発表によると、男性は福岡市西

新学部学科説明会/オープンキャンパス 7/15(日)1時から
日本工業大学